

随想

「任せる」と「頼る」

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

「任せる」と「頼る」は似て非なるもの！

いくら有能でも、自分だけでできることは限られている。著者はこれまで、やらねばならぬことをできるだけ自分でこなすことを心がけていた。獣医学の理化学を学び、縁あって大阪市立の家禽試験場という、鶏をメインテーマとして研究する試験場へ勤めた。もちろん養鶏業における鶏病コントロールのためである。その後、製薬会社の研究所で「薬の何たるか」を追及すること三年半。学生時代を併せて約一二年余りはサイエンス分野をもつぱらとしてきた。

環境であった。つまりは、必要なモノは工夫で調達しながら、一人でこなすことが常であった。一例を挙げれば、大正時代の蛇腹式カメラをバラバラにして、顕微鏡写真を撮影するカメラを自作する、といったことである。ちなみに、著者の学位論文になったニューカッスル病の研究に際して応用した論文の付図(写真)にはこの手作りカメラで撮影したものが多くある。そして、このカメラを見て、著者の病理学の先輩であり空手の先生でもあった舟橋紀男博士(一時著者を手伝ってくださった)はいみじくも語った。「すごいというよりかわいそう、と聞いてしまう」

さかのぼって四八年余り前に、臨床獣医師として採卵養鶏

業界の生産の場へ舞台を移した。臨床は経済の世界であり著者はまったくの門外漢であったが、知らないでは許されない。そこから「経済の何たるか」を自習することになる。

経済を学ぶためには「歴史」を、「地理」を……

養鶏業では国際感覚を要求されることをすぐに実感させられることになる。飼料コストは円・ドル価格バランスに影響されるからである。このことから、地政学の重要性を肌で感じた。もともと、GHQに禁止された地政学についての記述は一九九五年当時までは書店でほとんど見当たらなかった。書名は忘れたが、海軍国と陸軍国があり、日本が海軍国、ロシアや中国は陸軍国であり、海軍国が

陸であるいは陸軍国が海で戦うと弱い、等面白い知識を得た。さらに、臨床の世界へ入る前にすでに『次世代はコンピュータ時代』と予言した書物に触れていたため、四〇年余り前、業界へパソコンが紹介され始めたのを機にプログラミングに挑戦した。

「もし、ポケットコンピュータでプログラミングが組めないなら、私はコンピュータについては語るまい！」と考えたからである。世界に冠たる鉄鋼産業や繊維業界の推移、総合商社の何たるかもこの時代に学んだ。また、飼料中のアミノ酸理論と飼料原料中のアミノ酸レベルについてもしっかり！「P P Q C 研究所」と名付けた養鶏業界に特化した総合研究所を設立して三

年目に、かつてのクライアントで親しい友でもあった方の紹介で、飼料の専門家が著者の下へ来てくれたことがある(残念ながら、三年余りで袂を分かったが…)。彼と、アミノ酸分析値を踏まえて市販飼料の評価をすることを計画した。

身に過ぎたことではあったが、彼の計画に従って当時二〇〇〇万円もした分析システムを構築した。専門家であることを頼りに、その業務すべてを一任したものであった。期待に反して、分析の効率は極めて悪く、

採算が取れない中で三年間を任せきりにしたのである。彼と著者の意識のズレから、彼は三年半で退社する運びとなった(この経緯も、著者が別件を他のスタッフに一任したことが絡んでいた。著者が誠に未熟であった、と猛省)。

「飼料業界へのアプローチのためにアミノ酸分析業務を継続したい！」との思いで、アミノ酸分析法を学ぶことにした。当然、アミノ酸のことも、飼料原料とアミノ酸含量もその他モロモロも。そしてわかったのは一

人のプロの考えがすべてではない」という当たり前のこと。分野外ではあったが、飼料の分析を学んだ結果得たのは、一〇〇〇万円かけた分析システムの機能は二割以上も無駄を含んでいたという事実や、効率は発想で格段に上げられるといった、経験して始めてわかることが多い、というシンプルなことばかりであった。任せたつもりで頼っていたのである。

その後、経理や経営概論もコンピュータプログラムを介して学び、その理論や必要性を実感してきた。もともと、自分に与えられた時間は一日二四時間である。若くて体力があったとしても、一日に一八時間を働き続けるのは難しい。ムリに働けたとしても、三分以上は働けない。それを超えるときには、他の誰かの時間を頂くことになる。つまりは「任せる」か「頼る」かの問題が出てくる。

「頼る」かの問題が出てくる。「頼る」かの問題が出てくる。「頼る」かの問題が出てくる。「頼る」かの問題が出てくる。内容が家康が晩年になって若いときからのさまざまな出来事を思い起こす形で、一話完結の語り繋ぎと

して彼の一生を語っているものである。タイトルの「家康の遺言」は最後のエピソードに付けられたタイトルである。家康から見たらまだまだ思慮の足りない徳川二代目の秀忠へ、將軍として生涯心すべきコトを遺言として残したコトバは、小説でありながら著者にはまったく納得できる、今にも通じる座右の銘とも思える。

この短編の作者が、小説の場を借りて將軍秀忠に向かつて家康に言わせているのが次の言葉である。

『よいが、秀忠。任せるというのは、任せたことがすべてわかっておいて、一段上から見守ることじゃ。頼るというは、己がわからぬゆえ、代わりにしてもらうことぞ。しからは、その者が消えたり悪事を働いても、何もわからなくなる』

この後も、いろいろ続くが、著者の心に残ったのは、この部分である。確かに任せると頼るは、似て非なるものである。組織が小さいときには、そのすべてを知ることはさほど難し

くない。しかし、ある程度組織が大きくなると、そのすべてを知って任せることが困難となることは、読者の方々も感じられると思う。

大事なことは、人を見極められる目を養えるか否かではないだろうか?! 人は時を経て変わり得る。それでも、任せられるプロを見極められるか、はいわば腹で人を観ているか、である。自分の損得で人を観るのは将来にとつて良いと信じているか、「われをおいて護り、進められるかを見極めることを腹で人を観ること」と著者は信じていた。なかなか難しいことではあるが…。

注：仁志耕一郎による家康に關連する短編集。石川数正、鳥居元忠、渡辺守綱等家康を支えた忠臣や豊臣秀頼の妻となった千姫(家康の孫)等から見た家康を描き、また亡くなる前に秀忠へ残した遺言を題材とした短編集